



バイカルアザラシ (Phoca sibirica)

地域でのフィールド調査・研究の情報

水族展示のリニューアルが始まります

総括学芸員 桑原雅之

琵琶湖博物館の水族展示は、リニューアルに向けてこの9月から閉鎖し、来年7月にオープンします。

琵琶湖博物館は、1996年10月20日に「湖と人間」というテーマのもと、琵琶湖を中心に人の暮らしや文化と自然、それらを含めた環境と人とのよりよい関係について考えていただくことを目

的に開館しました。その中で、水族展示は水辺から湖内、さらには集水域にまで範囲を広げ、そこにすむ生き物の生活を再現することで、生き物と人とのつきあい方に思いをはせていただきたいと願って展示を続けてきました。これらの思いは、この19年間見学していただいた皆さんに、どのくらい届いたでしょうか。今回のリニューアルで

は、琵琶湖と集水域の環境と生き物の関わりをよりリアルに再現するとともに、琵琶湖と人の関わりについてもわかりやすく紹介していく予定です(図1)。また、琵琶湖は世界でも有数の古代湖ですが、残念ながら今の展示ではそのこともなかなか伝わりにくくなっています。そこで、「古代湖の世界」というコーナーを設け、古代湖の意義や古代湖としての琵琶湖の持つ魅力をよりわかりやすく展示してゆきたいと考えています。

新しい琵琶湖博物館 水族展示にどうぞご期待ください。



図1：新しい水族展示のイメージ図

生まれ変わる博物館

2016年夏
第1期リニューアルオープン

リニューアル期間中 展示室を『閉鎖』します

水族展示閉鎖：2015/9/1～、C展示室(環境)閉鎖：2015/11/9～

※A展示室(地学)・B展示室(歴史)は、ご覧いただけます。ご迷惑をおかけしますが、ご理解をお願いします。





写真2：バイカル博物館のあるリストヴィヤンカの展望台から見たバイカル湖。右側手前はバイカル湖から流れ出す唯一の河川、アンガラ川

古代湖の世界

ところで、皆さんは、「古代湖」という言葉をご存知でしょうか。「固有種が出現するくらい長い歴史を持つ湖」のことを古代湖と言います。何年以上という数字的な定義はありませんが、新たな生物種が進化してくる時間的スケールから考えて、おおむね10万年以上と考えられています。

世界の古代湖

地球上には20ほどの古代湖が知られています。その中でも、東シベリアに位置するバイカル湖(写真2)や、アフリカの大地溝帯にあるタンガニーカ湖・マラウィ湖などはその代表格ともいえるで



写真3：バイカル湖に生息するヨコエビの仲間

しょう。なかでもバイカル湖は3,000年以上もの歴史を持つ、世界最古の古代湖です。大きさは日本の本州を細くしたくらい、水深は1,600m以上もあります。これだけの歴史を持つ湖ですから固有種も豊富で、世界で唯一淡水に棲息するせいそく鱚脚類ひれあしるいバイカルアザラシを始め、1,000種以上の固有種が知られています(写真3)。

今回のリニューアルでは、バイカル湖、タンガニーカ湖、マラウィ湖そしてヴィクトリア湖の生き物を紹介することで、古代湖としての琵琶湖の持つ魅力を際立たせて行きたいと考えています。

古代湖としての琵琶湖

琵琶湖は古琵琶湖の時代を入れると約450万年、現在の琵琶湖が成立してから約40万年の歴史があるとされています。また、約60種の固有種が知られています。規模ではバイカル湖やタンガニーカ湖には及びませんが、たくさんの方が住む都市の真ん中にありながら、古代湖としての特徴を未だに有しています。また、人の暮らしとの関わりの深さや、その歴史の長さについては他の追従を許しません。そこから、「文化的古代湖」あるいは「生命文化複合体としての古代湖」とも呼ばれます。これからも、琵琶湖と上手につきあってゆきたいものです。

「魚と人との関わり」を伝える展示を目指して

主任学芸員 金尾滋史

新しい水族展示を考えるときに、「琵琶湖博物館らしい水族展示とはなんだろう？」といろいろ議論をした結果、たどりついた一つの考えが琵琶湖での漁や湖魚料理、水辺遊びの文化などの「琵琶湖の魚と人との関わり」を紹介することでした。

その中でも「琵琶湖の魚を食べる」ことは、多くの方に興味をもってもらいたい内容であり、力を入れて計画しています。琵琶湖にはコアユ、ビワマス、ホンモロコなど非常に美味しい魚がいま

す。また、ふなずしを代表とした伝統的な湖魚料理もたくさんあります。その一方で、このように淡水魚を食べるという文化は、滋賀県以外の方からすると非常に珍しいことです。また、近年では県内でも淡水魚を食べる機会がなくなりつつあり、少しずつ琵琶湖の魚と人との距離が遠ざかっています。

そこで、「食べる」ことを通じて琵琶湖の魚の価値、そして人との関わりを知ってもらおうと、水槽の魚たちに加えて、水族展示内に川魚屋のジオラマ（図）をつくり、食べておいしい琵琶湖の魚や、代表的な湖魚料理、そしてそれらの漁について映像やさわられる模型をつかって紹介していくことを計画しています。また、ふなずしの匂いが体験できるコーナーなど琵琶湖博物館ならではの話題を提供できればと考えています。このような展示を通じて、水槽で泳いでいる琵琶湖の魚を見たときに美味しそうだな、と思ってもらえるようになればと密かに期待しています。



図：新しい水族展示に登場する川魚屋のジオラマ

下流域のさかなと築漁

主査 山本充孝

いよいよ始まる水族展示のリニューアル工事。今の「里の生き物のコーナー」（写真1）は、川の下流域をイメージした流れのある水槽に生まれ変わる予定です。この水槽では、ただ川を再現するだけでなく、いろんな時期に琵琶湖から遡上したり、産卵したりする魚たちを見ていただくことができます。

また、期間限定で春から夏には現在も行われているヤナ漁（写真2）を展示したいと考えています。ヤナのような大がかりな漁具と生きた魚とを



写真1：里の生き物のコーナー

一緒に展示して、漁獲の様子を見ることができる水槽は世界初ではないでしょうか！しかし、この川の水槽で生き生きとした魚を継続的に展示するには、越えなければいけないハードルがいくつもあります。自然の川はいつも同じに見えても、実は水や石や土砂、魚までもが常にその場所にとどまっているわけではありません。例えば、ヤナ漁ではたくさんの魚が漁獲されますが、つかまるのは一度きりで2回目はありません。しかし、水槽の中では常に魚が入れ替わるわけではないので、魚が学習して次からはトラップに入らないかも知れません。これを実現するために、いろんな創意

工夫を考えています。



写真2：河川に設置されたヤナ。川に遡上する魚（主にアユ）を捕る漁法で他県にはほとんど見られません

【資料裏話 その18】 水族リニューアルに向けたビワオオウズムシの飼育

水族飼育員 長田智生

当館水族ではリニューアルに向けて、2013年よりビワオオウズムシの飼育試験を始めました。

ビワオオウズムシは体長5cmほどにもなるプランナリアの仲間で、琵琶湖の深い所に生息しています。湖内での生態すらよくわかっていない状況での飼育は、手探り状態で始まりました。捕獲個体は餌を食べず死んでしまいます。しかし、こ



ビワオオウズムシの幼体

れらの個体が産んだ卵は水温約10℃で飼育すると30日ほどで孵化します。孵化した幼生は体長5mmくらいで、冷凍赤虫を食べることがわかりました。

現在のところ、卵から孵化した幼生を育てることで、おおむね1年間飼育することは可能になりました。ただ、100日ほどかけて2cm程度にまで育ったところで成長が止まってしまいます。また、生まれたばかりの幼生を多数一緒に飼っていると、次第に数が減っていき死体も残っていません。これらの原因についてはまだよくわかりませんが、これからも試行錯誤を続けながら飼育方法の確立を目指していきたいと思います。

● 編集後記 ●

それぞれの学芸員が、工夫を凝らし議論を重ねわかりやすい展示を目指したりリニューアルが本格的に動き出しました。図に描いたものが実物になるとうれしくなり、1年後のオープンが楽しみです。(不熟)

鳥の目 魚の目 クイズ

● 「バイカル湖の深さは？」 ●

最も歴史の古い湖であるバイカル湖の深さはどのくらいでしょう？

答えは、紙面のどこかにあります。

- ① 約160m
- ② 約1,600m
- ③ 約16,000m

◆ 巻頭写真の説明 ◆

淡水にすむ唯一の鰭脚類であるバイカルアザラシは、世界最古の湖であるバイカル湖の固有種でもあります。今回のリニューアルでは、このバイカルアザラシを含め、古代湖にすむ固有種を展示しようと考えています。